



Shizuoka Health Sciences English Program (SHEP)

2007-2008

静岡県立大学健康科学英語研修プログラム



Global COE Program, University of Shizuoka
— Innovation in Human Health Sciences
University of Shizuoka

52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526, Japan

TEL: 054-264-5124 E-mail: gcoe@u-shizuoka-ken.ac.jp

URL: <http://gcoe.u-shizuoka-ken.ac.jp>

静岡健康科学英語研修プログラム

言語コミュニケーション研究センター長
国際関係学部教授 吉村紀子

静岡健康科学英語研修プログラム (Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP) は、静岡県立大学グローバル COE「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」を推進する重要なエンジンの一つとして、米国オハイオ州立大学 (The Ohio State University) アメリカンランゲージプログラム (American Language Program) と日本研究所 (Institute for Japanese Studies) のコラボレーションによって構築された海外英語研修プログラムである。その主たる目的は、静岡県立大学薬学研究科と生活健康科学研究科の博士後期課程に在籍する大学院生が国際学会で論文発表を円滑におこない、海外の研究機関を訪問し先端の研究者たちと学術交流を深め、専門分野でグローバルに活躍するために必要な科学英語コミュニケーション能力の向上を促進することにある。この目的を効果的に達成するため、本プログラムのコーディネーターであるオハイオ州立大学の中山峰治准教授と協議を重ねた結果、SHEP は以下のように運営されている。

実施期間はオハイオ州立大学の夏期休暇中の6週間、参加者は10人程度とする。授業内容は基本的に(1)基礎的なオーラルコミュニケーション能力の向上、(2)オーラルプレゼンテーションの実践的な技術の修得、に焦点を置く。また、2007年度の実施結果を踏まえ、(3)リスニング力の訓練、(4)アブストラクトの書き方、(5)ポスタープレゼンテーションの練習、を授業の中で取扱うこととした。さらに、参加者からの希望があれば、オハイオ州立大学の関連した施設一例えば、大学病院、リハビリテーションセンターなど一、あるいは同じ専攻の研究室を訪問できるように準備できる。

学習環境の整備では、研修中の滞在先は出来るだけキャンパスの学生寮を確保するようにし、またカンパセーションパートナー制度を導入して、参加者が日常的にも英語の実践練習ができるように工夫している。このカンパセーションパートナー制度は、参加者1人に対して1人のネイティブスピーカーが担当となり(有料)、1週間に6時間、インフォーマルな状況での英語会話の練習ができるものである。これまでの2年間の実績から、非常に有意義な学習機会となっていることがわかった。さらに、アメリカ文化の直接的な経験の場として週末のホームステイを設けている。

これまでの2年間の実績を踏まえて、第3回SHEPを2009年6月22日～7月31日(6週間)に実施する予定である。そのための準備は、3月末に実施するTOEFL-ITPテストの受験から始まり、数回のオリエンテーション、そして面談、というプロセスを経て、参加者の最終選定と進んで行く。参加者は、この準備期間中、事前英語教育の徹底、特にリスニング力のトレーニング、オハイオ州立大学の情報の取得、コーディネーターとの連絡、ESTAの登録手続き、等とさまざまなことに対応することとなる。

| | |
|-------------------------------|------|
| 2007 年度 SHEP 概要 | …1-2 |
| 2008 年度 SHEP 概要 | …3-5 |
| 静岡健康科学英語研修プログラム実施報告書 | …6-9 |
| | |
| <u>2007 年 SHEP 参加者感想文</u> | |
| 鈴木 拓史(生活健康科学研究科) | |
| 「OSU での生活・帰国後の交流について」 | …10 |
| 山田 建太(生活健康科学研究科) | |
| 「OSU での授業内容」 | …10 |
| 大島 幹弘(薬学研究科) | |
| 「私の英語の勉強法」 | …10 |
| 畑中 剣太郎(薬学研究科) | |
| 「研究室訪問を通して」 | …10 |
| 宮本 啓子(生活健康科学研究科) | |
| 「OSU での Medical Dietetics 訪問」 | …11 |
| 田副 秀章(生活健康科学研究科) | |
| 「初めてのアメリカ」 | …11 |
| 宮内 理絵(生活健康科学研究科) | |
| 「プログラム参加後の変化」 | …11 |
| 植草 義徳(生活健康科学研究科) | |
| 「発達した英語耳と感じ取れた英語のリズム」 | …12 |
| 小川 剛史(生活健康科学研究科) | |
| 「第一回 SHEP に参加して」 | …13 |

2008 年 SHEP 参加者感想文

| | |
|---------------------------------|-------|
| 稲守 朋子(生活健康科学研究科) | |
| 「OSU で出会った人々に感謝の気持ちを込めて」 | ・・・15 |
| 三坂 眞元(薬学研究科) | |
| 「SHEP 2008 に参加して」 | ・・・15 |
| 小出 裕之(薬学研究科) | |
| 「オハイオ研修を終えて ～寮生活～」 | ・・・15 |
| 高柳 祥一(薬学研究科) | |
| 「Department of Chemistry を訪問して」 | ・・・16 |
| 大住 美穂(生活健康科学研究科) | |
| 「SHEP を通して得た事」 | ・・・16 |
| 神谷 拓摩(生活健康科学研究科) | |
| 「オハイオ州立大学で 6 週間を過ごして」 | ・・・17 |
| 田代 京子(薬学研究科) | |
| 「SHEP に参加して」 | ・・・17 |
| 森 大気(生活健康科学研究科) | |
| 「現地学生との英会話を通じて」 | ・・・18 |

2007 年度静岡健康科学英語研修プログラム(SHEP)

(オハイオ州立大学—2007 年 12 月 1 日～21 日)

概略

SHEP の目標は、静岡県立大学大学院博士後期課程健康科学専攻の大学院学生に対し、英語での国際会議に積極的に参加し、英語で効果的なプレゼンテーションができるように練習の機会を提供することである。3 週間の研修期間中、すべての英語スキルが学習できるように、特に、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、ディスカッションに焦点を絞って、指導を行った。学習内容については、可能な範囲において、健康科学の分野に関連したものを取扱うように配慮した。学生たちの研究はプレゼンテーションのトピックとして活用した。

使用テキスト

Seal, *Academic Encounters: Human Behavior*

Espeseth, *Academic Listening Encounters: Human Behavior*

King, *The Big Picture: Idioms as Metaphors*

Hagan, *Sound Advice* (2nd edition)

Morley, *Listening Dictation*

カリキュラム

授業は月曜日～金曜日、1 日 3 時間で、金曜日はクラスでの研究レポートや英作文について個人指導を行うために、チュートリアルを実施した。以下は主な学習活動のまとめである。

基礎リスニング・スピーキング—Listening Dictation の練習問題はクラスで終了させ、参加者は音声テープ等を利用して追加の練習問題もそれぞれ行うように指導した。聴解力、発音、流暢さの向上を図りつつ、基本文法の復習をおこなった。また、*Sound Advice* を用いて、英語の理解に欠かせないストレス、リズム、連続音のリエゾン等の練習をおこなった。

招待講師による講義—以下の 3 名による招待講演（健康科学関連）を実施した。講演は、参加者からの質疑応答、そしてディスカッションと展開した。

[講演者と演題]

Stephen Rosenstiel, The Ohio State University – The safety of dental amalgam

Karl Romstedt, Capital University – Cancer

Margaret Ginn-Pease, Capital University – Enzymes

スピーキング力向上のためのグループ活動—参加者のスピーキング力及び自信の向上のため、毎週、次のようなグループ活動を行った—例えば、物語の作成、グループ同意活動、即興スピーチ。

リーディング・ディスカッション—アカデミックなトピックについて議論できるように、**Academic Encounters** 掲載の論文を読み、内容についてグループで討論した。その際、以下の場合に役立つ機能語句や表現—例えば、理解できない、他者の参加を促す、同意する、反対する、話題の転換、議論を前に進める、不明点を確認する、意見を述べる—を練習した。

プレゼンテーション—参加者はプレゼンテーションを4回おこなった—（1）公式な自己紹介あるいは友人紹介、（2）インターネットからの論文の概要発表、（3）各自の研究分野で用いる概念の説明、（4）各自の研究概要の紹介（一般者対象にして）。効果的なプレゼンテーションのスタイルや方略に学習の焦点を絞った。特に（3）と（4）については、チュートリアルにて1人ひとり復習を行うと同時に、ファイナルプレゼンテーションについては事前に練習した。なお、ファイナルプレゼンテーションには、中山峰治氏（オハイオ州立大学プログラムコーディネーター）、本研修プログラムALP責任者、吉村紀子氏（静岡県立大学プログラムコーディネーター）が参加した。

ライティング—参加者は上記の4つのプレゼンテーションの要約を書き、その英作文はチュートリアルにて添削された。なお、ライティングについては特別な活動を行わなかった。

作成：オハイオ州立大学アメリカンランゲージプログラム講師 Louis Holschuh
邦訳：静岡県立大学グローバルCOE事業推進担当者（領域5） 吉村紀子

2008年度静岡健康科学英語研修プログラム(SHEP)

(オハイオ州立大学—2008年6月16日～7月25日)

概略

第2回目の実施となる2008年は、当初の計画通り、研修期間は6週間であった。参加者(8名)は、国際会議に積極的に参加し、効果的なプレゼンテーションをおこなうための英語力の習得に多くの時間を費やすことができた。さらに、今回、キャンパス内の寮に生活し、アメリカ人のカンパセーションパートナーやホストファミリーがいたことは、参加者にとって、インフォーマルな会話を練習でき、クラスで習ったオーラルコミュニケーションを実践できる、実質的な機会となった。

6週間の研修では、すべての英語スキルを学習できるようにしたが、特に、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、ディスカッションのスキルの向上に力を注いだ。指導では、可能な範囲において、健康科学の分野に関連したものを取扱った。学生たちの研究はプレゼンテーションのトピックとして活用した。

使用テキスト

Seal, *Academic Encounters: Human Behavior*

Richek, *The World of Words* (7th edition)

Hagan, *Sound Advice* (2nd edition)

Morley, *Listening Dictation*

カリキュラム

授業は月曜日～金曜日、1日3時間であった。加えて、プレゼンテーションについて個人指導を行うため、チュートリアルを参加者1人に対し3回実施した。主な学習活動として以下のことをおこなった。

リスニング・発音練習—Listening Dictationの練習問題はクラスで終了させ、参加者は音声テープ等を利用して追加の練習問題もそれぞれ行うよう指導した。リスニング力、発音、流暢さの向上を図りつつ、基本文法の復習をおこなった。また、*Sound Advice*を用いて、英語の理解に欠かせないストレス、リズム、連続音の結合等の練習をおこなった。

招待講師による講義—より長い談話の理解力の向上を図るため、録音された会話やアカデミックレクチャーを活用した。研修後半の2週間は、以下の3名による招待講演(健康科学関連)を実施した。講演では、参加者からの質疑応答、そしてディスカッションと展開して行った。

[講演者と演題]

Stephen Rosenstiel, The Ohio State University – The safety of dental amalgam

Karl Romstedt, Capital University – Cancer

Margaret Ginn-Pease, Capital University – Enzymes

また、オハイオ州の医療リハビリテーション施設 (Dodd Hall) の見学を行ったが、英語での説明であったので、長い時間英語を聴く練習にもなった。

正確なスピーキング—このプラクティスは、専門用語がプレゼンテーションで正確に発音できるように、参加者の研究分野からのキーワードを音声練習した。さらに、*Academic Word List* (Coxhead 2000)から単語を選択して発音練習した。

流暢なスピーキング—流暢さと自信を向上させるため、毎週数回、物語の作成、グループ同意活動、即興スピーチ等を行った。

リーディング・ディスカッション—アカデミックな話題について議論する力を促進するために、*Academic Encounters* からの論文について小グループでのディスカッションを実施した。特に、以下の場合に役立つ機能語句や表現—例えば、理解できない、他者の参加を促す、同意する、反対する、話題の転換、議論を前に進める、不明点を確認する、意見を述べる—を練習した。参加者は、ディスカッションリーダーとしての言語活動も練習した。

プレゼンテーション—参加者はプレゼンテーションを5回行った—(1) インターネットからの論文の概要発表を2回、(2) 各自の研究分野で用いる概念の説明、(3) 研究プロジェクトのポスター発表、(4) 各自の研究概要の紹介 (一般者対象にして)。効果的なプレゼンテーションのスタイルや方略に学習の焦点を絞り、テーマの導入方法、使用する概念や用語の定義方法、聴衆への配慮方法、そしてスライド等の使用方法を学習した。特に(1)と(3)に関しては、チュートリアルにて1人ひとり復習を行うと同時に、ファイナルプレゼンテーションについては事前に練習した。なお、ファイナルプレゼンテーションには、中山峰治氏 (オハイオ州立大学プログラムコーディネーター)、本研修プログラム ALP 責任者、吉村紀子氏 (静岡県立大学プログラムコーディネーター) が参加した。

単語—*The World of Words* から資料を作成し、単語力の強化を意味と発音の両側面から行った。

ライティング—参加者は各自のプレゼンテーションの要約を作成した。その中で生じた単語や文法の間違いについては、添削した。ただし、ライティングについては学習時間が制約された。

作成：オハイオ州立大学アメリカンランゲージプログラム講師 Louis Holschuh

邦訳：静岡県立大学グローバル COE 事業推進担当者（領域5） 吉村 紀子

静岡健康科学英語研修プログラム実施報告書
(Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP)

オハイオ州立大学准教授 中山 峰治
静岡県立大学教授 吉村 紀子

静岡健康科学英語研修プログラム (SHEP) は、静岡県立大学グローバル COE「健康長寿科学教育研究の戦略的新展開」の教育推進プログラムの一環として、静岡県立大学言語コミュニケーション研究センターとオハイオ州立大学アメリカンランゲージプログラム及び日本研究所のコラボレーションによって、静岡県立大学薬学研究科と生活健康科学研究科の博士後期課程の大学院生の英語コミュニケーション能力の向上のために特別に開発された海外英語研修プログラムである。

2007 年度

2007 年度は、グローバル COE の実施一年目で、準備期間等の問題のため、当初の予定であった夏期 6 週間の研修期間を冬期 3 週間に変更し、12 月 3 日～21 日に実施された。参加者は学内選考の上、10 名となった。研修が冬期休暇の 3 週間に短縮されたため、学内の寮が手配できず、キャンパスに近いホテルに滞在することになった。担当は、オハイオ州立大学の附属語学研修機関・アメリカンランゲージプログラムの前所長で、英語教育に経験豊かな Bill Holschuh 講師が担当した。

授業

授業内容は、SHEP の目的—薬学・健康科学の博士後期課程の大学院生が国際学会等で円滑な研究発表や学術交流ができるように英語コミュニケーション能力の向上を図ること—に沿って、英語プレゼンテーションの実践的な方策、技術、展開の修得を目指した。静岡にて事前に受けた TOEFL-ITP テストの結果を参考にして、クラスレベルやシラバスを設定したが、参加者のほとんどが大学 1～2 年生以降、英語を系統立てて学習していなかったため、基礎英語力の復習をおこないつつ、段階的に表現力を向上させていく方向で授業を進めて行った。特に、生の英語にほとんど接していなかったため、リスニング力の不足が目立ち、その問題を解決する上で、授業でおこなった英語の子音と母音の連結の練習やセンテンスレベルのディクテーションが参加者にとって役に立ったようである。

プレゼンテーション力の向上のために、金曜日は個人面接授業とし、発表の準備、特に原稿に沿って発表するスピーキングの練習をおこなった。参加者は一生懸命に努力をした結果、研修最終日におこなった口頭発表は研修直後の英語習熟度レベル、また 3 週間の短い研修期間から考えると、満足できるレベルであったと言える。ただし、参加者の多くが感じていたように、これまで英語での口頭発表を実際に経験したことがなかったので、3 週間ではやっと英語のエンジンが回転し始めた段階で研修が終了することになり、「もったいない」と感じた。

ゲストレクチャーと研究室訪問

参加者の専門分野を考慮して、オハイオ州立大学及び近郊の大学から講師を招待して講義を 3 回実施した。また、参加者は事前に面談の予約をして、オハイオ州立大学の研究室

—例えば、薬学、食品科学、応用薬学、健康科学—を訪問し、院生や先生たちと意見交換をした。ただ、これらの活動も冬期の3週間という制限のため、十分でなかったかもしれないので、2008年にはより効果的な交流を実施したいと考える。

研修成果—英語力の向上

今回は3週間という短い研修であったが、大きな成果として第1に指摘できる点は、参加者が英語コミュニケーションに対してある程度の自信と積極性が持てるようになったことである。最初は、「何をどのように言ったらよいのか」わからなかったようであるが、研修が進んで行く過程で、あいさつ、教室での質問、日常的な話、研究トピック等についてあまり躊躇しないで、積極的に、自らコミュニケーションを働きかけることができるようになった。

英語力の向上について、参加者が研修前後に受けた2回の団体向けミシガンテストの結果に基づき具体的に説明すると、英語の基礎力（単語・文法・リーディング）及びリスニング力では顕著な伸びは見られなかった。これは、研修期間が3週間であったこと、また参加者の英語学習上の空白があまりに長かったこと、等が主な要因と考えられる。一方、興味深いことにミシガンテストの作文においては顕著な伸びが見られた。例えば、6段階の評価において研修前はレベル2が6人いたのに対し、研修後には4人に減少し、またレベル4の参加者は研修前には1人もいなかったのに対し、研修後には3人がそのレベルに達した。さらに、2段階以上向上した参加者が10人中5人いた。これらの結果は、プレゼンテーション学習が意見を短時間に、論理的に整理し、発信するための練習に効果的であったことを示している（詳細は Yoshimura & Nakayama 2008, *Japanese Health Sciences Doctoral Students in a Study Abroad Context*. 『国際関係・比較文化研究第』7巻, 151-161 参照）。

2008年度の実施に向けて

研修後に実施したアンケートの結果、参加者が一番苦勞をしたのは「英語が聞けなかったこと」であったということがわかった。このリスニング力の不足の問題は、SHEPに参加する以前に練習することである程度解決できるのではないかと考えられる。つまり、静岡における事前研修としてリスニングのトレーニングを集中して実施することが必要であろう。また、ある参加者は研修期間中に「英会話」を学習したかったと述べていたが、SHEPの本来の目的—科学英語力の向上—を十分に周知するよう事前教育の重要性を再確認した。

参加者は基本的な英語コミュニケーション力の習得も必要なので、カンパセーションパートナー制度の活用が望ましいようである。同時に、アメリカの学生との交流という点から、研修期間中の滞在先としてキャンパス内の寮の確保が望ましい。

2008年度

2回目の実施となった2008年度は、前年度終了時から時間をかけて準備をおこなったこともあり、教育研究的にも、またプログラムの実施面でも、円滑に進めることができた。

まず、学内の英語科目の設置と充実により、参加者の英語学習に対する動機づけや意欲、向上心等を高めることができたことは、SHEPの実施においてよい結果に繋がった。また、前年度と同じ講師が担当できたので、SHEPの参加者の研修目的、ニーズ、英語学習上の困難点などに関する予備知識と実質的な経験に基づいてシラバスや教材の工夫ができた。

さらに、研修期間が6週間となったことで、日常会話の練習のためのカンバセーションパートナー制度の導入、週末のホームステイの実施、ポスター発表の実践練習、等が可能となった。

産学連携室に海外研修の窓口を設けることができたことも本年度の SHEP の円滑な運営に繋がった。特に、参加者との連絡、オハイオ州立大学のコーディネーターとの情報交換、参加者への情報の提供、TOEFL-ITP の受験に関する業務、SHEP の静岡でのオリエンテーションの開催、がおこなわれたことは非常によかった。また、5月に開催した領域5のワークショップ **Teaching and Learning Scientific English** に参加するために、州立大のコーディネーター中山とアメリカンランゲージプログラムの所長代理 **Gary Whitby** が静岡を訪れ、参加者に直接会って、SHEP や英語学習に関するいろいろな質問に答えることができたこともプラス要因であった。

授業

参加者は8名で、英語の習熟度は昨年同様同一のレベルではなかった。授業の進め方や指導方法は昨年とほぼ同じであったが、昨年度よりモチベーションが高かったように感じた。これは、2008年が2回目の実施で、2007年の参加者から体験談を聞いたり、事前の英語学習ができたためであろう。また、カンバセーションパートナーとの最低1週6時間の英語コミュニケーションや週末のホームステイは、参加者にとって日常会話などの練習の機会であると同時に、アメリカ文化や社会に接するよい機会を提供してくれたようである。また、学内の学生寮に6週間滞在できたことも図書館の利用等を考えるとよかった。これらの生活上の要因が相互的に作用して、積極的に授業に望み、英語でコミュニケーションを図ろうとする態度の構築につながったのではないかと考えられる。

プレゼンテーションのために毎週金曜日に個人面談を実施した Holschuh 講師から、参加者の到達度から見てポスター発表を追加したいという提案があり、実施された。ポスター発表当日は、秋からアメリカの大学や大学院に入学する予定の留学生とアメリカンランゲージプログラムの英語講師がたくさん来て、各発表者にさまざまな質問をしていたが、参加者はある程度スムーズに質疑応答が出来ていた。SHEP に参加する前に見られた、質問がわからない時に「沈黙する」ということはなく、どうにかして適切に答えようとする積極的な姿勢がそこに見られたのはおおきな収穫であった。

研究室訪問

研修期間が6週間であったことで、参加者はいろいろな研究室を訪問できたようである。訪問した研究室は10室以上であり、加えて、希望者は事前予約により James Cancer Hospital や OSU Medical Center の実験室やリハビリ施設を見学することができた。現場では、参加者たちは日本の施設との多大な違いに驚いていた。ゲストレクチャーは昨年とほぼ同じ内容のものであった。

研修の成果—英語力の向上

2007年と同様に、参加者は研修前後に団体ミシガンテストを受けた。その結果によると、まず2008年度は参加者のプログラム開始時の英語力が前年度の参加者より高かった。これは、2007年度より学内で開始された科学英語の科目を履修し、英語の学習を事前におこなっていたことを考えれば、理解できる結果である。つまり、今年度の参加者は SHEP へ

の準備がより整っていたと言える。

6週間の研修を通して、基礎英語力（語彙・文法・リーディング）（平均 64.1 から 65.5 へ上昇）やリスニング力（平均 71.4 から 72.9 へ上昇）が伸びたことはもちろんであるが、この研修の目的である論理的な発表力とスピーキング力が伸びたことを強調しておきたい。まず、発表力であるが、団体ミシガンテストの作文では、6段階の測定基準において平均でレベルは 2.9 から 4.1 に伸びて構成がよくなった。もう少し詳細に説明すると、研修前のテストではレベル 2 が 2 人、レベル 3 が 6 人いたのに対し、研修後はレベル 2 の参加者はいなくなり、レベル 3 が 2 人、レベル 4 が 3 人、レベル 5 が 3 人、それぞれいた。2007 年度と比較すれば、次の 2 点—（1）レベル 5 が 3 人出たこと、（2）参加者全員のレベルが 2 段階以上伸びたこと—は特記すべきことである。

次に、2008 年度は SPEAK（300 点満点）というオーラルコミュニケーション力を測定するテストを導入したが、その結果によると、平均 82.5 から 111.3 へ伸びたことがわかった。ただし、留意したい点は、このテストは通常 100 点以上のスピーキング力の学習者を対象に開発されたものであるから、SHEP の参加者はスピーキングが最も困難であったことである。この点を克服するためには、静岡においてスピーキングのクラスを充実することが急務である（詳細は Yoshimura & Nakayama 2008, *Ars Linguistica* 15, 54-64 参照）。

今後の課題について

まず、研修期間は 3 週間より 6 週間の方がより効果的で、滞在先、ホームステイなどを考慮すれば、夏期の実施が適切である。そして、カンバセーションパートナー制度の継続は参加者のオーラルコミュニケーション力の向上にとって特に重要である。

次に、SHEP に参加する前に、基礎英語力の復習、リスニング力の訓練、スピーキング力の向上を図れるような演習を静岡において提供することが必要であることを強調したい。そのためには、SHEP が特別な行事ではなく、理系大学院生のための系統立った英語教育課程の中で SHEP を有機的に活用できるような教育システムの構築が望ましい。そして、2008 年の参加者の成果からわかるように、参加者の英語力向上への動機づけと継続的な努力が必要である。

2007 年

「OSU での生活・帰国後の交流について」

生活健康科学研究科 鈴木 拓史

私にとって初めての海外経験であったため、アメリカへ降り立った瞬間はとても不安な気持ちでしたが、今となっては短くも充実した3週間の OSU 生活が始まりました。最初の1週間は、時差ボケとの戦いで、変な時間に起きてしまい、ガサゴソと各部屋からメンバーの動く音が聞こえていました。そんな生活の中、OSU の英語学習プログラムは着実に進むわけで、聞き慣れない英語と日本とは全く異なる生活環境に慣れるまでにやはり時間がかかりました。しかし、英語に耳が慣れた頃には、買い物などにも気楽に行けるようになり、ほんの少しですが海外で生活することへの自信に繋がりました。授業を担当していただいた先生方ならびにスタッフの方々にも生活をする上でのさまざまなアドバイスをしていただき、不便なく生活することができ、私にとっては初めての海外経験でとても充実した日々を送ることができました。帰国後は、OSU に参加したメンバーの撮った写真を郵送したり、メールのやり取りを行ったりと、お世話になった OSU のスタッフと連絡を取り合っており、今でも交流を深めています。OSU での経験は、私にとって非常に良いものとなりました。

「OSU での授業内容」

生活健康科学研究科 山田 建太

OSU での授業内容は、主に基礎的なオーラルコミュニケーションスキルの向上を目的とした授業と、科学英語によるディスカッション・プレゼンテーションの練習でした。特に、リスニング力を鍛えるためのディクテーション、英語の表現力を向上させるためのイディオムの習得、流暢な英語を発音するための正しいアクセントとリズムの練習は、とても効果的な学習法だと感じました。また、3人のゲストレクチャーによって、科学英語による専門的な講義を体験することが出来ました。ディスカッションとプレゼンテーションの実践練習として、週に1度の

発表会を行いました。発表会の後、個別指導が設けられ、スライドのデザインや原稿、発音などを細かく指導してもらうことで、最終日に行われる発表会に向けて、プレゼンテーションを改善しました。これらの授業は、英語をコミュニケーションの手段として、学術的な場や専門職で活用することを目的とした学生を常に指導している専門の先生によって行われたので、とても理解しやすく、楽しんで授業を受けることが出来ました。このような貴重な体験は、英語学習プログラムが既に構築されている OSU でなければできないものと思いました。

「私の英語の勉強法」

薬学研究科 大島 幹弘

私が OSU に行くまでの英語勉強法は、論文など英語を読むという勉強法でした。しかし、実際に OSU に行き気づいたことは、会話としての英語を理解する事は読むこととは違う、ということでした。会話をしても、何を話しているかわからないが、それを文字として書いてもらうと理解できる。もっとも大切なことは、英語を日本語に翻訳して理解することではなく、英語を英語として理解するということでした。それに気づいてから、私はひたすら英会話を習得すべく、iPod を利用して、常に英会話を聞き、英語を英語として理解することができるようになりました。その結果、日本に戻る前にはある程度会話英語を理解できるようになりました。日本で生活すると日ごろから英語に触れる機会は余りないと思います。その中でも、一日に1時間でも30分でも英会話に触れる機会を作るようにし、英語を日本語に変換することなく英語を英語としてそのまま理解するように努力しています。

「研究室訪問を通して」

薬学研究科 畑中 剣太郎

3週間の静岡健康科学英語研修 (SHEP) に参加し、英語によるコミュニケーション能力を養うことができたのではないかと思います。研修

前期は各自英語での資料作成や実際に発表や質疑応答を行うことによって、英語でコミュニケーションをとることに対して自信がついたと思います。また研修後期にその分野を担う研究者やオハイオ州立大学大学院生とディスカッションする機会を志願し、自分の研究資料を持ち込んで情報交換を行ったことは貴重な経験になりました。この際、伝えたいことがなかなか伝わらない場面もありましたが、ジェスチャーや資料を大いに活用し何とか議論できたのではないかと思います。また、大きな収穫として自分の英語によるコミュニケーション能力のレベルを認識し、その重要性を理解することができたことだと考えています。海外の教授や学生と大学や研究について意見交換することができ、国際的な視点に立って物事を考える良い機会になり、現在の英語学習の励みになっています。

最後に、このような機会を与えてくださった静岡県立大学、オハイオ州立大学の先生方にご場を借りて御礼申し上げます。

「OSU での Medical Dietetics 訪問」

生活健康科学研究科 宮本 啓子

2007年12月の第1回目 SHEP に参加した大学院生は各自の研究分野に関連した研究室訪問を行ないました。OSU は、全米最大の規模を誇る総合大学で、参加した大学院生 10 人のそれぞれの研究分野の研究者が揃っていました。私は管理栄養士として OSU Medical Center の MEDICAL DIETETICS を訪問しました。MEDICAL DIETETICS では、R.D. (Registered dietitian; 登録栄養士)養成課程の学部、インターンシップ教育、大学院が設置されています。そこで Kay Wolf 先生、Katherine L. Mulligan 先生にお会いし、アメリカにおける R.D.養成教育や R.D.の業務について話をしました。R.D.はアメリカ栄養士会 (ADA) による登録資格ですが、受験資格として 900 時間以上のインターンシップ(実習)が義務づけられ、学生の時に患者の栄養ケアの訓練を受けます(日本の管理栄養士養成過程における臨地実習

は 4 週間です)。アメリカの R.D.たちは専門性の向上に熱心ですが、その根源はこの学生のと時のインターンシップでの経験にあると聞きました。このように他国の状況を知り、自分達のことを振り返る機会を得たことは SHEP における予想外の収穫でした。SHEP に関わってくださっている全ての皆様に御礼申し上げます。

「初めてのアメリカ」

生活健康科学研究科 田副 秀章

短い期間だったが、英語学習に専念することができたのはいい刺激になった。またアメリカ的な考えや人の受け答えに触れるのは、逆に日本的なものの考え方を客観視することになった。それぞれの環境に必要な所作・考え方があるということが、自分の世界との向き合い方に新しい実感として身についたように思う。

また、普段話すことのない博士課程の学生と一緒に生活できたのは楽しかった。それぞれ研究のフィールドは異なるが、博士号取得という目的に対する困難さは共通だ。自分も頑張ろうという気力が湧いた。

最後に本プログラムに携わられた事務局、先生方に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

「プログラム参加後の変化」

生活健康科学研究科 宮内 理絵

プログラムの参加から 10 カ月たち、その間には報告会や渡米、国際学会など英語を必要とする機会がいくつかありました。それらを振り返って感じるのは、このプログラムによってリスニング力が向上したことです。紙の上の文章が、「話す」時にどう変化するのか・・・声の大きさや強弱のリズムでわかる話の要点や、文中の隣り合った単語同士がつながるのか、それとも略されるのか、プログラムではそういった変化についての授業もあり大変勉強になりました。また、プログラムの一環として iPod を活用した英語学習法を紹介していただき、貸与していただいたことにより「英語耳」をより成長させることができたと思います。理論的に理解する

ための授業と訓練するための機会、この2つのプログラムのおかげでリスニングのコツがわかり、自己学習のポイントが掴めました。とはいえ、日本にいと待っていても英会話の機会はほとんど訪れません。勘が鈍らないようにうまく日常に取り入れて継続的に学習していきたいです。

「発達した英語耳と感じ取れた英語のリズム」
生活健康科学研究科 植草 義徳

私たち博士後期課程の学生は、研究成果を学術論文としてまとめ、時には国際学会で報告し、さらに他国の研究者と意見交換を行うなど英語に接する頻度が高く、英語コミュニケーションの重要性を常日頃から感じています。そのような中、2007年12月に約3週間、アメリカのオハイオ州立大学にて静岡県立大学グローバルCOEプログラムの一環であるSHEPが開催されました。私が苦手とするリスニングやスピーキング能力を向上させることで、国際学会での英語によるプレゼンテーションが聞き取れず理解できない、質問したいのに話せず躊躇してしまうといった悔しい経験から解放されるかもしれないと思い、この短期英語研修プログラムに参加しました。偶然にも出国直前にいくつかの国際学会に参加したことから、英語学習に対するモチベーションが上がった状態での渡米となりました。

成田を出発し日付変更線を越え、シカゴ経由でOSUのあるコロンバスに到着しました。空港からアメリカの町並みを眺めながら車でしばらく走ったところに、その広大なOSUのキャンパスはあります。そのスケールの大きさに圧倒されながら宿泊地に到着した私たちはさっそくオリエンテーション後にOSU周辺を散策しました。歩いている途中や店の中で聞こえてくるのは当然の如く英語ばかり。しかも普段なじみ深い科学英語ではなく、口語中心の日常会話。これから3週間本当にやっていけるのだろうかと思差の眠さと戦いながら不安になったのを覚えています。

私たちを指導して下さったBill先生の授業は

とても丁寧で興味深い内容が多く、あつという間に一日の授業時間が過ぎてしまうほどでした。教科書を用いた授業はもちろん、英文聞き取り問題や科学英語プレゼンテーション練習、そしてOSUで実際に教壇に立たれている先生の特別講義など、日常的な会話から実践的な科学英語まで幅広く学べるものが多かったです。また、授業のない午後の時間は各自で図書館に行き、宿題や予習、そしてリスニング教材を用いた自己学習などわずかな時間でも有効に活用し、英語に向き合うという生活を続けていました。最初の一週間は慣れない土地で生活するという環境の変化に苦労していた私たちですが、時間が経つにつれて心に余裕ができ、以前と比べて自然に英会話が聞き取れるようになっていきました。

冒頭で述べたように、今回のプログラムで私は特にリスニング・スピーキング能力の改善に重点をおいていたのですが、この研修期間中にいくつか気が付いた点がありました。一つ目は、常に英語が聞こえてくる環境において、自分の耳がどんどん英語耳になっていくということです。耳が無意識のうちに英語を聞き取ろうとがんばっているのか、最初は英語かどうかわからなかった会話が英語に聞こえ始め、そして内容もだんだん理解できるようになってきたのです。二つ目は、英語耳を発達させるためには自分も正しい発音をし、正しいストレス(アクセント)の取り方を身につけなければいけないということです。つまり自分が間違った発音で覚えていた単語は、ネイティブの人との会話の中で出てきても自分の知らない単語だと認識してしまい、会話を見失ってしまう原因になってしまうのです。また、口語的な用法(ellipsisやreduction, want to = wanna)の仕組みを知ったことも、英語耳をより発達させる手助けになったと感じています。さらにネイティブの人たちが話す英語にはリズムのようなものがあり、この独特のリズムも少しですが感じ取ることができて良かったと思っています。

残念ながら今回はカンパセーションパートナ

一制度がなかったため、現地の学生と話す機会がほとんどありませんでした。しかし、現地で私たちの生活をサポートしてくれた Ken との何気ない会話が勉強になり、非常に有意義な時間でした。文化の違いも肌で感じる機会が多く、一人一人の自主性・積極性が重んじられ、何かしたいことがあっても自分から動かないと周囲は何もしてくれないという、日本とは違う生活様式についても再認識しました。さらに、今回の研修プログラムでは私の研究分野に関係するいくつかの研究室を訪問する機会もあり、OSU で研究活動をされている先生と 1 対 1 でお話をすることができました。特別に研究室のセミナーまで参加させて頂けたのはとても貴重な経験でした。セミナーにおける現地学生たちの積極的な討論に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えています。

OSU のキャンパスにリス達が走り回る光景を見慣れてしまった頃には、もう研修期間の 3 週間が過ぎてしまいました。向こうでの生活にも慣れ始め、私の英語耳と英語脳エンジンがようやく暖まり動き出そうとしている時の帰国で、3 週間は短く、もう少し滞在して勉強できればと少し残念に思いました。しかし全てが新鮮で良い経験となり、何よりも今後の自分に自信がつかしました。また、プログラム終了後も英語学習に対する意欲は衰えず、現在も iPod を利用したリスニング学習やセミナー等への積極的な参加を心がけています。さらに、外国人の方に自分から積極的に話しかけられるようになった、「外国人慣れた」というのも大きな成果だったと感じています。今回私たちは最初の SHEP 参加者でしたが、良かった部分は積極的に取り入れ、改善できる点は見直し、第 2 回 SHEP につなげて頂けたらと思っています。

最後になりましたが、私たちの英語学習に大きなご支援・ご協力をして頂いた OSU 関係者の皆様、静岡県立大学グローバル COE 関係者の皆様、そして共に四苦八苦しながら英語を学習した博士後期課程の参加者の皆様に心より感謝致します。

「第一回 SHEP に参加して」

生活健康科学研究科 小川 剛史

私は 2007 年の 12 月に実施された第一回静岡健康科学健康英語研修プログラム (Shizuoka Health Sciences English Program, SHEP) に 10 名のメンバーの一人として参加させていただきました。このプログラムの概要については吉村教授が書かれているので、私はプログラムの印象・感想を中心に述べたいと思います。

研修地であるオハイオ州は東海岸よりに位置し、時間帯はニューヨークと同じです。つまり合衆国の中でもより日本から遠いほうに位置します。また、高緯度に位置するため研修当時はダウンジャケットが必須といえるほど寒い気候でしたが、メンバーの多くがその寒さを楽しんでいるようでした。ちょっとしたことで気持ちを盛り上げていこうとする雰囲気が私達の間にあつたように思います。私自身これまでに海外旅行の経験はありましたが、3 週間の短期間とはいえ「海外で生活する」というのは初めてであり、さまざまな期待と不安を感じつつのスタートでした。実際、最初の数日の間にコミュニケーションに必要な Listening, speaking といった各能力の不足という現実を痛感し、時差ボケや食生活の違いなどに悩まされているうちに最初の一週間が過ぎ去ったように思います。

当然ながら目にする文字は全て英語です。CNN も同様です。最初のうちはホテルの隣にあるコンビニ店員の「With bag ?」さえ何かボソボソと言っている程度にしか聞こえませんでした。それでも私達が英語学習への意欲を失う事なく全員が皆勤で授業へ参加し続けることができたのは、授業を担当して下さった Bill 先生によるところが大きかったのではないかと思います。私達は多くの日本人と同様に、文法は理解しているがオーラルコミュニケーションは不得意という状態でした。先生は私達の英語力を把握した上で、最適と思われる授業内容を組んでくださいました。特に私達にとって Listening Dictation 等、訓練法は英語に慣れていく上で非常に効果的でした。是非とも義務教

育に取り入れて欲しいです。また、出発前に貸与していただいた iPod を用いての Listening の訓練もナチュラルスピードの英語に対応するのに効果的であったと思います。そういった少しずつの積み重ねが私達の英語力を徐々に向上させていったと言えます。もっとも合衆国内でも地域によって喋る速さは異なるようで、一般に都会であるほど早いそうです。研修を行った OSU のあるオハイオ州都コロンバス市は人口約 70 万人であり、日本でいう政令指定都市には及びませんが、全米 15 位であることからおそらく早口な方でしょう。

さすがに 2 週目以降は各メンバーとも気持ちに余裕が持ちはじめた様子で、授業中の先生との会話もより積極的に行われるようになっていきました。また、OSU の学生に案内していただいた、アメリカなスーパーマーケットでのショッピング体験は、私達にアメリカで生活しているという事を印象づけてくれました。しかし、3 週間とは短いもので、私自身が手ごたえを感じはじめたあたりであえなく帰国となりました。それでもプログラムの最初と最後に行われたテストでスコアが上昇しており、数値としても英語能力の向上が現れた事は大変嬉しく思います。また、スコアに関わらず今回のプログラムは 10 名のメンバーそれぞれにとって有意義なものになったのではないのでしょうか。

私は iPod を現在も活用しておりますし、洋画を鑑賞する際には字幕だけでなく、俳優さんの英語そのものにも無意識のうちに注意を向けるようになりました。この事は自分でも驚いております。

最後になりましたが、私達のために SHEP を計画、支援してくださった静岡県立大学および OSU の多くの先生方、スタッフの皆様へメンバーを代表して深く感謝いたします。

ありがとうございました！！（メンバー 一同）



2008 年

「OSU で出会った人々に感謝の気持ちを込めて」
生活健康科学研究科 稲守 朋子

私がアメリカ体験で最も印象深かったのは、様々な人々との出会いです。ALP (オハイオ州立大学 American Language Program) のスタッフの皆様、ALP の学生の皆、カンパセーションパートナー達、ホームステイ先の皆様、スポーツクラブの皆…どの出会いも特別で、一生大切にしたい人達です。

この人々との出会いを通して私が強く感じたのは、「自身の文化に対する造詣の深さ」「相手の文化を正しく理解しようとする姿勢」でした。例えば、私のパートナーのレイさんは、日本の源氏物語のような古典文学と西洋古典文学の違いについて造詣が深く、大変面白い考察を聞かせてくれました。また、他の方は日本文化には詳しくなくとも、往々にして自身の文化について詳細な知識を持っていて、ホストマザーは宗教観について、スポーツクラブの人達はエクササイズについて、自文化の中でそれらがどう扱われてきたかを私に教えてくれました。そしてその上で、日本ではそれらがどう扱われているかを正確に理解しようとしている姿勢が、会話の端々に感じ取れました。

しかし、その類の会話になる度に、私は「日本」という国や「日本文化」について、吃驚するほど知識がないことに気付き、己を振り返って反省することしきりでした。相手と本当の意味で分かり合うためには、自身の軸となる文化に対する理解が不可欠であり、その上で相手の何を知りたいかを整理し、それを正確に伝える語学力を磨くのが肝要である、と気付かせてくれた OSU の皆様と、その機会を与えてくださった SHEP スタッフの皆様に、今は感謝の気持ちで一杯です。

「SHEP 2008 に参加して」
薬学研究科 三坂 眞元

今回、私は SHEP 2008 に参加し、英語力を上達させるには最高の環境で学ぶことが

できただけでなく、アメリカの大学、特に私の専攻する薬学分野での研究室の様子を知る貴重な機会を得ることができました。私が訪問したのはオハイオ州立大学薬学部で呼吸器系の研究をされている Daren L. Knoell 教授の研究室です。先生の研究室は Davis Heart and Lung Research Institute という医学部の附属施設にありました。この施設では、Knoell 先生のような薬学部の先生と循環器・呼吸器系の研究に携わる医学部の先生たちが同居しており、学部を超えた交流や研究が盛んに行われていました。私はこの施設全体から感じられる活気とアカデミックな雰囲気にとっても感銘を受けると同時に、自分の研究に対する良い刺激となりました。最初は全て英語でコミュニケーションをとることや、たった一人で訪ねることから緊張と不安でいっぱいでしたが、Knoell 先生を始めスタッフの方たちからは非常に友好的に接していただき、そんな不安もすぐに払拭されました。また、私のぎこちない英語でも何とか会話をすることができ、それが英語を話すことへの自信につながったということも大きな収穫であったと思います。本プログラムを通じて、私は授業による英語の学習だけでなく、他の様々な経験が英語を上達させる上でとても役に立ったことを強く実感しました。

「オハイオ研修を終えて ー寮生活ー」
薬学研究科 小出 裕之

オハイオ州立大学での研修中、私たちは寮で生活をしていました。日本にいる間、私は寮での生活経験がなかったため、不安を抱えて行きました。しかし、寮には、私たちと同じように他国、他州から語学研修、研究目的に来ている学生が多数おり、活気にあふれていました。同じような境遇のせいか、彼らと仲良くなるのにそれほど時間はかかりませんでした。彼らと仲良くなることで、英語にふれる機会が増え、英語への抵抗が薄れてい

くことを感じました。さらに、もっと自分の意志を伝えたいと思うことで、その日に表現できなかった会話を必死で覚え、今度は言えるようにと勉強時間も自然と増えていきました。また、外食が多かったため、最初の方はお店の人の英語が聞き取りにくく返答に困惑してしまう場面が多かったのですが、日にちを重ねるにつれて徐々に慣れ、何を聞かれても慌てずに対処できるようになっていきました。アメリカでの生活。どれをとっても勉強になることばかりで、英語を勉強するには非常に良い環境ではないかと思えます。全ては自分次第。向上心をもって積極的に話をすれば、その分上達も早いと思えます。私はこの寮生活の中で、沢山の友人に囲まれ、普段はあまり出来ない“英語で話す”という大変貴重な経験させていただきました。この機会を与えてくれました大学に感謝したいと思えます。

「Department of Chemistry を訪問して」

薬学研究科 高柳 祥一

SHEP に参加したのは、英語で研究分野である有機化学の講演を聴き、討論できるようになりたいという目的があった。これまで、論文を読むことで科学英語に接してきたが、講演を聴いたり、研究について討論を行ったりするといった機会はほとんどなかった。そのため、専門用語における日本語と英語での発音の違いを実際に体験でき、自分自身がどの程度理解できるのかを知ることができる絶好の機会であった。事前に、コンタクトの取れた Department of Chemistry の Craig J. Forsyth 先生とお会いすることができ、Department Seminar 及び Group Meeting に参加した。Seminar では、Saverio Florio 先生(Universita di Bari, Italy) と中尾佳亮先生(京都大学)の講演を聴く機会を得た。母国語が英語でないということもあり、理解しやすかったが、聴き取ることで精一杯で、聴きながら考えるといったレベルにまで到達で

きていないことを感じた。Group Meeting では自分自身の研究について発表させて頂いた。自身の説明の拙さもあり、活発な討論ができたとは言えず、歯痒い思いをした。これから、研究を続けていく上で、英語で意思疎通を図ることが必須であると改めて感じた。

「SHEP を通して得た事」

生活健康科学研究科 大住 美穂

約 6 週間に渡るオハイオ州立大学での英語研修に参加した経験は、今まで私が経験したどんな事よりも刺激的なものとなりました。今まで英語を使用するのは主に論文を読むくらいしか無かったので、研修初日から緊張の連続でした。ゆっくり喋ってくれているはずの英語も、何を言っているか一瞬では分からない始末で、最初は会話にすらならず、もどかしい思いをした事を覚えています。しかし、毎日午前中に行われる授業を通して、間違い事や、人前で話す事を恥ずかしがらず英語を使いコミュニケーションを取る事で、次第に積極的に話す事が出来るようになったように思います。また毎週末に行われるプレゼンテーションの授業では、自分の知識をいかに他人に分かるように伝えるかという点で大変参考になりました。また発表態度という点においても、母国語ではない英語という事で原稿に頼りがちになりそうですが、原稿に頼らず発表する事で英語を自分のものにする一つの機会になったように思います。しかし、常に私たちに「Don't be shy」と笑顔で話しかけてくれた先生の助けがあったからこそだと思います。

たった 6 週間でしたが、あの場所で体験した事や出会った人々全てが私にとって勉強であり、素晴らしい思い出となっています。このような素晴らしい体験をする機会を与えて頂き、この研修を支えて頂いた先生たちに大変感謝しています。

「オハイオ州立大学で6週間を過ごして」

生活健康科学研究科 神谷 拓摩

日本語を勉強しているオハイオの子供が、日本語は文章がどこで切れるのかわからないと言っていたことは印象深かった。

私も OSU に行った直後はこの子供と同様な状態であった。現地の人と会話しても、どこで文章が切れるかわからず、何を言っているかさっぱりわからなかった。実際に話されている英語は省略されたりつながったりする “生きた” 英語であるためだ。

オハイオ州立大学の第二言語としての英語教師はそういった事を良く理解していた。私たちは話し言葉特有の省略・連結する発音や、文章全体のリズムを毎回の授業で必ず教わった。周りは英語しか無いため、教わったことはすぐに確認する事ができた。知識がすぐに体験として還ってくる環境は言語の学習にとっても重要らしく、私も徐々に生きた英語を理解できるようになっていった。こういった環境は、生きた言葉が話されていない場所では得難いものだと思う。

SHEP の 6 週間という期間は、完全に英語を習得するにはとても短い期間である。少なくとも私にとって博士課程後期のこの時期に生きた英語を体感できたことは想像以上に意義深い事であった。今後の SHEP 参加者が同様の意義を感じ取ってくれることを祈りたい。

「SHEP に参加して」

薬学研究科 田代 京子

私が研究生生活を送る中で、常々、英語の必要性を感じており、独学で英語の学習をつづけていました。主に、NHK のラジオ講座や、そのほか市販のテキストを用いた学習を行ったり、TOEIC を受けて、英語力をチェックしたりしていました。しかし、リスニング、スピーキングなどは独学に限界があると感じ、実際に生活で使える英語、研究生生活で役に立つ英語を身につけたいと思っていました。

た。そのような時に、SHEP の募集があり、私は迷わず申込みをしました。TOEFL のテスト、英語での面接を経て、私は、幸いプログラムに参加することができました。私は、リスニング、スピーキングの向上、そして、英語でのプレゼンテーション力をつけたいという目標を持ち、研修旅行に挑みました。

私たちのアメリカでの生活スケジュールの中心は、午前中、9時から12時まで3時間行われる講義です。講義の前半はテキストを用いて、発音の勉強をしたり、ディクテーションをしたりしました。日本で学習していたときのテキストは、ネイティブとはいえ、発音がわかりやすかったのですが、アメリカでおこなった発音練習、聞きとりは、はじめは聞き取れたものの、回を重ねるに従って難しくなっていき、大変苦戦しました。講義の後半では、ある題材について文章を読んで、それについてディスカッションをしたり、impromptu speech (即興の3分間スピーチ) をしたりしました。そのほかにもいろいろとバリエーションに富んだ講義内容で、すべてが興味深いものでした。その他、全3回、OSU の理系の講師の方々を招いてゲストレクチャーを聞かせていただきました。先生方は、私たちが英語を学びに来ている学生であることを理解してくれていて、大変わかりやすくお話をしてくださいました。

また、ほぼ毎週、全5回、プレゼンテーションの課題がありました。前半2回はインターネットで検索した科学記事の紹介をし、3回目は私たちの行っている研究について背景を発表、4回目はポスター発表、そして、5回目は研究内容についてさらに詳しく発表するファイナルプレゼンテーションです。専門家ではない一般の方々を対象とするプレゼンテーションは大変難しく、とても苦労しました。しかし大変良い勉強になりました。私たちの担当をしてくださった Bill 先生はとても親切な先生で、常に私たちを励ましてくれました。

OSU の研究室を見学する機会もいただきました。私は College of Pharmacy の Chen 先生の研究室を訪問しました。Chen 先生のところでは、学生さんのポスター発表を聞いたり、セミナーに参加したり実験を見学させていただきました。大変貴重な経験をすることができました。

ファイナルプレゼンテーションが終わってから、farewell party があり、修了証書の授与式がありました。到着した当初は長く感じられた OSU での研修期間が終わるときはとても感慨深いものでした。OSU で過ごした貴重な 6 週間を活かして、これからも英語学習に励みたいと思います。

この場を借りまして、SHEP プログラムで大変お世話になった中山先生、Bill 先生、Gary Whitby 氏をはじめ関係者の方々に深く御礼申し上げます。

「現地学生との英会話を通じて」

生活健康科学研究科 森 大気

研究者が研究を進めていく上で、リーディング能力とライティング能力は欠かすことができません。また、自らの研究を世界に発信するためには、英語で世界各地の研究者と議論ができるリスニング能力とスピーキング能力が必要です。リーディングやライティングの能力は、授業や日々の論文読み、学術論文の作成を通して磨かれていきますが、リスニングとスピーキングに関しては、実際に必要に迫られた英会話の経験を積めるような機会が少ないため、大幅な上達や意識改革はなかなか得ることができません。そこで私は、英語教育プログラムの一環としてオハイオ州立大学 (OSU) との連携で開催される科学英語海外語学研修プログラム (SHEP) への参加を決意しました。また、昨年度に本プログラムに参加した学生による報告会での建設的な意見も、私が参加を決めた理由の一つです。

昨年度から開始された本プログラムです

が、今年は二つの点が昨年と大きく異なっていました。一つは、参加した博士後期課程学生の各々にカンパセーションパートナー (英会話などを決められた時間以上行うことを契約した現地学生) を得た点です。カンパセーションパートナーとなった OSU 学生は、全員が車を所有しており、それぞれの参加者が色々なところに連れて行ってもらい、とても有意義な時間を過ごすことができました。

また、基本的にカンパセーションパートナーと二人で行動することが多かったため、生の英会話を数多く体験できたことがとても大きな収穫でした。この経験を通して、他国の人とのコミュニケーションには、英語は必須であるということ強く実感させられました。変更されていたもう一点は、学生寮が借りられていた点です。学生寮には共同のキッチンや卓球台などが設置されていました。私たちが卓球を楽しんでいると、同じ寮内に住んでいた他国の留学生が話しかけてきて、ともにプレーするというようなスポーツを通じた出会いの機会が何度かありました。新たにできた留学生の友人たちは、カンパセーションパートナーと異なり、話すスピードにも遠慮が無く、その点も私の英会話能力の向上に繋がった要因の一つであると思います。

OSU での 6 週間の英語研修を通して、行く前には想像できなかった他国の人とのやりとりにおいて実際に必要なものを完全に身につけることはできませんでしたが、充分に知ることができました。この度の研修は、今後も英語という言語を多用する私にとって、能力面でもモチベーションの面でも非常に大きな糧となりました。私は、帰国後の現在も iPod を利用したリスニング強化プログラムに参加しており、これからも SHEP に参加して磨いた能力を伸ばしていきたいと思っています。

本プログラムは、参加者がプログラム終了後に答えるアンケートの意見を取り入れることで改善され、年々良いものになっていま

す。博士後期課程に在籍している学生は、このようなプログラムに参加する機会を逃す手は無いと思います。

最後となりましたが、SHEPの計画・運営に携わって下さった OSU 関係者の皆様、静岡県立大学グローバル COE プログラム関係者の皆様のご尽力に 2008 年度 SHEP 参加者を代表して、深く御礼申し上げます。



Global COE Program – Innovation in Human Health Sciences

<http://eng-gcoe.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

Contact:

Administration Office, Global COE Program, University of Shizuoka

52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526, Japan

TEL: 054-264-5124 E-mail: gcoe@u-shizuoka-ken.ac.jp

URL (in Japanese): <http://gcoe.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

